

News Letter

International Office in Agriculture

<http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/>

留学生を迎えるために

梅田 幹雄

〔農学研究科教授
地域環境科学専攻〕

子供の頃から世界の国々に興味があった。高校生の頃、中世ヨーロッパ史に興味があり、世界史の教諭になろうと考えたこともあった。この頃無銭旅行の本も随分読んだ。大学院を修了したらドイツに留学したいとも思っていた。受験参考書に「ヨーロッパ史を勉強するには2ヶ国語ができないとだめだ」と書いてあった。当時、英語がまったくできなかった私はこの1行で世界史専攻を諦めた。大学ではサッカー部に入ったため、残念ながら無銭旅行は夢と消え、修士課程修了後すぐに三菱重工に入社したので外国留学の夢も実現しなかった。

三菱重工相模原で入社12年目に、修学旅行の意味で2週間アメリカに行かせてもらった。1982年8月の明け方、飛行機の窓からノースダコタの平原を見たとき「これがアメリカか」と体が震えた。1987年に京大に戻って来ることができ、外国での調査の夢が実現するようになった。1993年ボンでの学会終了後、東ベルリンを訪れた。統一直後であったためアレクサンダー広場の不潔さと、郊外の宿泊施設の設備の貧弱さに「あのドイツ民族が、異民族に50年支配されるとどうなるのか」と背筋が寒くなった。

1994年に10ヶ月という短期間であったが、ドイツ・シュツットガルトのホーエンハイム大学に留学する機会を得た。ドイツの工科大学には准教授の制度がない。ホーエンハイム大学は農科大学であるが、私のいた農業工学研究所は工科大学と同じ制度となっている。研究員は博士論文を書くための研究を行なって、博士号取得と同時に大学を離れる。このため、研究室の構成員の年齢は、教授を除くと25~35歳である。そこに背の低い、髪と目が黒く、既婚で、博士号を有する47歳のドイツ語の話せない者が入ってきた。まさにエイリアンであった。

人間、耳が働かないと目と脳が働く。また、立っている場所が変わると考え方が変わる。留学中、市内、ドイツ国内は言うに及ばず、ヨーロッパの多くの国を訪問し、いろいろ考えた。私は機械設計を始めて以来「機械は設計者の頭の中から生まれてくる」と信じて疑わなかった。しかし、「私の機械は、日本という風土、狭い地域に人々がひしめき合って住んでいる国の人間の頭の中から生み出されたものだ」と気づかされた。外国と物事を進めるためには、国情・風土・人々の考え方を理解する努力が必要だと考えるようになった。

外国と日本では社会システムが異なる。たとえば、日本では銀行の暗証番号は自分で設定するが、ドイツでは銀行が決める。口座を作った直後「暗証番号の登録方法を教えてくれ」と質問したら、銀行員は「このエイリアンは何を言っているのか」と質問の意味を理解してもらえなかった。郵便局ではドイツ語が読めないと思われ「宛先の“通り (Strasse)” の名を書き欄が空白であり、間違いだ」と言われた。「日本では“通り” 沿いに住宅があるのではなく、ブロック単位で住んでいるので、住所に通りの名前がない」と説明したかったが、よほど言葉ができないとこのような複雑なことは説明できない。言葉のできない者は低能力に見える。来日直後のほとんどの留学生が、こ

のような混乱に遭遇しているのではないかと心配している。

私はまったくドイツ語が話せなかったが、辞書を引けば読むことはできた。しかし日本語の場合、韓国人と中国人を除くと、辞書を引くことすら難しいと思われる。留学生を迎えるためには、英語で授業を行なうことも大切だが、社会システムの違いや手続きの仕方を教えてあげることが必要である。このためには、教員だけでなく事務職員の語学力と相手の国への理解が必要である。

社会システムの相異による混乱に加えて、残念に思ったことは、研究室の構成員との交流は深まったが、隣の研究室の人と交流の機会が少なかったことである。この問題を解消するために、研究を離れた交流の場を持つことの必要性を痛感した。田中克先生から「2002年日韓ワールドカップ大会を記念して、日韓選抜対世界選抜の留学生対抗サッカー大会をやらう、梅田さんはサッカー部の部長だから世話をしてくれないか」と頼まれた。国際交流室の教職員と農学部のサッカー部OB教員の全面協力、また当時の松野研究科長に優勝カップを寄贈していただき、「松野杯サッカー&バーベキュー大会」が実現できた。理想とする留学生との交流にはまだまだ改善の余地があるが、森田勝子先生のご尽力もあり今年で7回目を終えることができた。来年3月の退職後もサッカー大会には参加したいと考えている。

最後にまったくどうでも良い話であるが、出町柳と農学部の通勤路の途中、東大路通りの西側に「Leben Platz Hyakumanben」という名前のアパートがある。固有名詞なのでこれで良いのだが、das Leben (life 生命、人生)、die Platz (place 広場、場所) という言葉がドイツ語にあるので、ドイツ語と考えるのが自然である。ドイツ語は発音の容易さが最優先である。生命 (Leben) を維持する手段 (Mittel)、つまり「食料」という言葉はLebenとMittelを合成してdas Lebensmittelという。このとき真ん中に「s」を入れて発音しやすくする。「Leben Platz」は発音しにくい。やはり「s」を入れて「Lebensplatz」にするべきだろうと、朝夕アパートの前を通るたびに考えてしまう。そして、こんなことを考えている自分はよほど暇なのだとなきれている。



滞っていた農業工学研究所 (Institut fuer Agrartechnik) 近くのキャンパス角に古風な旅館兼食堂がある。イギリス人は車が来ないと赤信号で渡るが、ドイツ人は青信号になるのを待つ。留学当時この交差点には信号機があり、車が来ないのに皆青信号を律儀に待っていた。2006年に宿泊したとき信号機はなくなり歩行者優先となっていた。

交流の歩み (39)



“Three memorable months in Kyoto”

Malcolm Fitz-Earle
Guest Professor
(Capilano University, North Vancouver,
BC, Canada)

Life in a city or town can be far more rewarding than simply making brief visits. In the summer of 2007 I was privileged to live in Kyoto, a city that previously I had only visited for short periods. My plan was to do research, to write, to meet as many people as possible, and to enjoy the life and culture of Kyoto. In fact what I achieved was rewarding beyond my expectations. I had a most memorable summer in Kyoto.

My stay in Kyoto University as a guest professor was made possible by the kind invitation and generous support of Professor Akio Takafuji of the Laboratory of Ecological Information in the Graduate School of Agriculture. In the three months that I spent in Prof. Takafuji's laboratory, we enjoyed many discussions together ranging from our common research and teaching interests to more general topics. I particularly enjoyed our regular lunch meetings at Prof. Takafuji's favourite restaurants near to the Yoshida campus.

While in the Graduate School of Agriculture I initiated a research project on wildlife and pest management and spent many pleasant hours reading, writing and preparing seminars in an environment free from any administrative obligations. My seminars to the Graduate School included such topics as conservation of biodiversity, wildlife – human conflicts in agriculture, and techniques for writing scientific English. As well as presentations at Kyoto University, I was invited to speak at a symposium held at Tokyo University sponsored by an environmental NGO.

One of my greatest pleasures during the summer was to meet informally with faculty, post-doctoral scholars, graduate students, undergraduates and staff from the Graduate School of Agriculture at Kyoto University, from elsewhere in Japan, and in fact from several other countries too. I spent time discussing research and other topics, as well as reviewing papers and other documents. I met many great people.

I was fortunate to be able to go on a number of research field trips. Prof. Takafuji took me and one of his former

students to Shimane prefecture, where I saw first hand a number of strategies for reducing wildlife-human conflicts in agricultural areas. This field trip also included visits to the historically important city of Matsue with its castle that is the original wooden structure dating back to 1611, and to Mt. Sanbe National Park with its fossilized Cryptomeria trees. On another occasion, I visited Shimyoin Temple north west of Kyoto, where the priest had waged a successful campaign to stop development on the nearby mountain, Iwaya san. In doing so, he succeeded in protecting several endangered plant and animal species.

During my three months in Kyoto I went to several festivals and many historical sites. I was taken to the Gion district to see the huge floats being assembled for the Gion Festival and while there I visited some of the traditional houses that had been opened to display the treasures used to decorate the floats. I have fond memories of going to Tanukidani Fudoin temple in the Higashi Yama area not far from where I lived. It is usually a serene place to visit, to see a statue of the priest Kobodaishi, to meditate in one of the evocative temple buildings, and to stand on the main temple balcony to view the city far below. However, once a year it has a fire festival in which accumulated wooden prayer boards are burned in a spectacular bonfire and, once the fire subsides, people are invited to walk across the remains of the fire. I joined the crowd and was blessed by the chief priest of the temple after crossing the hot coals.

In the summer I visited numerous gardens, temples and shrines. I rode my bicycle along the Kamo river bank and to / from the university. I took relaxing walks along the Philosopher's Walk near the university, and elsewhere. I traveled to destinations farther away by the public transportation that is so convenient and relaxing.

I would like to thank Professor Okumura, Dean, Graduate School of Agriculture and Professor Takafuji for making my visit to Kyoto University possible. I would also like to thank Assistant Professor Morita and her colleagues in the International Office for helping me in many ways during my stay. As well I would like to thank the many others who made my summer in Kyoto so memorable.

I was making progress with my research project and getting to know better the fine people of Kyoto University when my three month stay ended. My visit was all over so quickly, but it has left many lasting memories. I miss Kyoto very much and I hope to return some time in the future.

(November 21 2007)

◆ 外国人客員教授 ◆

平成20年9月～平成21年3月、外国人客員教授として下記の6名の先生を招聘しています。

氏名: **Zaki Anwar Siddiqui**
国籍: インド
招聘期間: 平成19年10月1日～平成20年9月30日
所属・職: アリガルフ マスリム大学・助教授
研究題目: ナラ・カシ類とマツ類の成長と萎凋病に及ぼす菌根菌と植物成長促進根圏細菌の影響
受入教員: 地域環境科学専攻・微生物環境制御学分野・二井一禎教授

氏名: **Pavel Barsukov**
国籍: ロシア
招聘期間: 平成19年10月3日～平成20年10月2日
所属・職: ロシア科学アカデミー・主任研究員
研究題目: ユーラシア寒冷地域における土壌有機物動態の解析
受入教員: 地域環境科学専攻・土壌学分野・小崎 隆教授、舟川晋也准教授

氏名: **HakGyoon Kim**
国籍: 韓国
招聘期間: 平成20年9月1日～平成21年3月10日
所属・職: 国立釜慶大学・招聘教授
研究題目: 沿岸地域における有害有毒赤潮の発生機構及び防除に関する研究
受入教員: 応用生物科学専攻・海洋環境微生物学分野・今井一郎准教授

氏名: **Sang Ha Noh**
国籍: 韓国
招聘期間: 平成20年12月8日～平成21年3月7日
所属・職: ソウル国立大学・教授
研究題目: マシンビジョンによる果実のキズ検出システムの開発
受入教員: 地域環境科学専攻・農産加工学分野・清水 浩准教授

氏名: **Anderson Wayne Darwin**
国籍: カナダ
招聘期間: 平成21年2月2日～平成21年5月1日
所属・職: サスカチュワン大学・教授
研究題目: 土壌炭素動態のユニバーサル・モデルの構築
受入教員: 地域環境科学専攻・土壌学分野・舟川晋也准教授

氏名: **Mendoza Tecson Evelyn Mae**
国籍: フィリピン
招聘期間: 平成21年3月23日～平成21年6月22日
所属・職: フィリピン大学ロスバニョス校・研究教授
研究題目: 種子貯蔵タンパク質の構造と食品機能
受入教員: 農学専攻・品質設計開発学分野・内海 成教授

留学生の眼 (27)



私の留学記；宇治でお茶と会う

Kang, Min-sook (康 敏淑)
(食品生物科学専攻・韓国)

私の母国、韓国では、日本は『近くて遠い国』とよく言われる。肌色や文化など近くて似ているが、民族性や考え方などはっきり違う色を持っている両国だ。韓国と日本、日本と韓国は、隣国として歴史の中でお互いに影響を与え続けていると思う。負けず嫌いの両国のスポーツ戦（サッカーや野球など）がある時はすごく面白い。

私は高3時代、活動したInteractクラブで交換学生の資格として日本へ初めて来た。純粹だったのか田舎っぽかったのか、私にとって初めての海外旅行だった。東京で一週間の短い期間だったが、親切だったホームステイ先の家族や案内して下さったおじさんたち、明るく話かけてくれた日本の高校生たちに、今でもありがたい気持ちを持っている。その経験がなかったら、私にとっても日本は『近いけど知らない国』だっただろう。

勉強を続ける中で、食品の機能性についてもっと学びたかった私は留学を決心した。アメリカか日本か、私は迷わず日本に行くことにした。アメリカも良いところだ。しかし、経験した親密感もあったし、日本をもっと知りたいという気持ちが大きかった。その時、周りはアメリカへ行くケースが多かったので、学校や知りたい情報をネットで調べた。ネットの情報だけでは気が済まなかった。“そう、直接行ってみよう。その後、決めよう。”そうして、2004年1月来日した。

東京で日本語学校に通い、調べることにした。今考えてもそのバカな勇気はどこで出たのだろう。私は言葉という『壁』におつかった。2才よりもしゃべれなかった。生活費のためバイトした保育園で2才の子供に絵本も楽しく読んであげられなかった。‘遅すぎて楽しくないと言われた。’悲しかった。今まで、学校の垣根の中で社会も知らず、両親の保護を受けてきた私が、日本では、ただのしゃべれない外国人労働者だった。秋ごろになって、テレビがだんだん楽しくなった。ちょっと自信感が出た。少なくとも“私がやりたいのはこれです。”と日本語で説明出来るようになった。その時期、興味深い実験を行うLab.を見つけた。京都大学の河田教授（先生）にメールと郵便を出した。次の日、先生から連絡を頂いた。涙が出るほど嬉しかった。見学しに京都へ行くことにした。東京発京都市夜行バスで私は初めて京都へ来た（夜行バスは大変だという教えを得た）。京都駅周辺は東京と変わらなかったが、宇治線の電車はだんだん東京とは違う景色へ向かった。たまに、窓の外でお茶畑が見えた。後で宇治はお茶が有名だという事が分かった。そして、河田先生は私に機会を下さった。それで、私は試験を受けて合格し勉強することが出来た。

せっかく京都で勉強しながら綺麗な名所を十分回れなかったのは残念だったが、私は良い人たちに恵まれたと思う。河田先生と奥様は生活に必要なお皿や物を揃えて下さり、私の生活に気を配って下さった。平井さん、後藤さん、篠藤さん、村上さん、黒柳さん、キムさん、浅野さんなどLab.の皆さんは研究生活や私生活でも親切に暖かく付き合ってくれた。おかげで諦めず、楽しく無事に学位を授与されたと思う。

そして、奨学会（ロータリー米山奨学会）で私はいろんな出会いと機会をもらった。小山さんと上林さんは私に宇治のお茶を紹介して下さいました。小山さんは京大農学部の大先輩でもあり、お茶を採って加工してお抹茶やお茶になるまでを親切に説明して下さいました。大変な手間のかかる作業で、お抹茶やお茶の高値が納得できた。お茶と茶道に興味を持ち、小山さんの紹介で黄檗駅近所の渡辺先生から茶道を経験することにした。お二人の方からお心づかいを頂き宇治でお茶を学ぶことが出来た。

短い期間だったので学ぶというより体験が正しいかも知れない。初めての茶道、足がしびれて大変だった。結局、私一人小さい椅子に座って恥ずかしかった記憶がある。宇治川辺の朝日焼きという焼き物屋さんで渡辺先生がお茶会を開く時、渡辺先生は私に着物と必要なものを貸して下さい、出席することが出来た。親切にも興味がある私の友達まで誘っていただき、Lab.の日本人の友達も一緒に行った。いいお茶とおいしいお菓子、素晴らしいお茶碗など全部が素晴らしい。もちろんそれだけではなく、落ち着く平穏な気持ちまで。特に彼らと一緒に日本文化を学ぶいい機会だったので意味があった。日本人だから茶道は出来るものだと思っていた。そういえば、私は韓国人だから当たり前キムチが漬けられるという事もない。

日本と形式は違うが韓国にも韓国のお茶と茶道がある。私はいつの間にか伝統は古いと思い、新しい文明と欧米化した食生活に慣れていた。日本で生活する時いろんなことを感じたが、帰国したら自分の国のものにもっと関心を持つことにしようと思った。母国の伝統を大切に思い、続けるのは美しいと感じた。

誰かは私の事を見て‘遠回りしていたね’とか‘余計に時間を無駄にしていたね’と話す。しかし、私はそう思わない。保育園で一緒に遊んだ2才の子供が5才になったが、私を忘れず見た瞬間私の名前を呼んでくれたとき。カトリック教会の活動として浅草辺でプラザーさんを手伝いホームレスの方に弁当ボランティアをしたとき。そのときの喜びは私には忘れられない財産だと信じている。最高の道ではなかったが私は最善の道を選んだと思う。

今までの私の出会いは日本と韓国の出会いではなかった。ヒトがヒトとしての出会いで暖かくて良い記憶でいっぱいだ。現在は『日本で韓流、韓国で日流』文化を交流しながらお互いの文化を味わい理解している。両国の偉い方は目の前の利益より、もっと大きい利益と平和のために協力し、いい方向で引張ってくれたらと願っている。

留学中いろんな形で助けてもらった多くの方々にも感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございました。これからもよろしく願います。

◆ 特別講演会 ◆

2008年5月23日（金）16:30～17:30
Dr. Zaki Anwar Siddiqui
(Aligarh Muslim University・Associate Professor)
“Biocontrol of Plant Parasitic Nematodes”

2008年9月17日（水）15:00～16:00
Dr. Pavel Barsukov
(Institute of Soil Science and Agrochemistry:
Leading research scientist)
“Annual international soil-ecological excursion
in Siberia is a favorable basis
for field education of Kyoto University”

◆ 農学部国際交流ニュース ◆

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

平成20年の後援会加入のお願いを7月に御案内いたしました。本年も学内および学外の方々（9月12日現在で96名、1団体）からご賛同をいただいておりますが、会員は年々減少しております。会費は留学生や外国人研究者との交流を図る諸行事の費用として使わせていただいております。引き続き随時受け付けておりますので、よろしくお願い申し上げます。

外国人留学生の大学院修士課程入試の結果

8月19日～21日にかけて、平成20年度大学院修士課程入試が実施されました。今回は合格者はありませんでした。

10月入学短期留学生

<KUINEP留学生 1名>
・食品生物科学科 Ms.Boonyapichest, Chutinan (タイ)
<大学間学生交流協定に基づく短期留学生 1名>
・応用生命科学科 Mr.Chen, Zhen Jiang (台湾)

行事アラカルト

◆新入留学生オリエンテーション&歓迎パーティー◆



29名の新入留学生(学部、大学院)及び17名の新入外国人研究生を迎え、4月8日(火)に国際交流室においてオリエンテーションを行いました。その後、本部構内の「カンフォーラ」において、歓迎パーティーを開催しました。奥村研究科長、遠藤評議員、縄田国際交流委員長、矢澤前研究科長、本部国際交流センターの森教授、長山教授をはじめ多数の教員、職員、在学中の留学生など総数80名余りの参加者があり、新入留学生の自己紹介などを行い、楽しい交流会となりました。

◆バス1日研修◆



農学部のスクールバスで年に2回春と秋にバス1日研修を行っています。今年度春は5月27日(火)に、滋賀県立琵琶湖博物館、草津市立水生植物公園水の森、栗東あられ本舗工場へ見学に行きました。客員教授2名、共同研究者1名、留学生、研究生30名が参加しました。博物館ではファブル昆虫記の特別展覧会を見学、水生植物園では美しい花々に感激し、今なお手作業で作る小さなあられ工場では質問が次々に飛び交い、新緑を眺めながらの楽しいバス研修でした。

◆サッカー & バーベキュー大会◆



恒例のサッカー&バーベキュー大会も第7回を迎え、今年度は6月14日(土)に行いました。今回は理学部も合同で企画したところ、沢山の参加申し込みがあり、梅田教授、小林准教授、木下助教の指揮の元でチーム編成、試合時間等調整し、午後1時から4時30分まで存分に汗を流し、サッカーゲームを楽しみました。国単位の参加や研究室単位の参加もあり、今年度は応用生命科学の発酵生理学研究室の優勝となりました。サッカー後のバーベキュー大会も大いに盛り上がり、良い交流会になりました。ご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

◆見学旅行◆



7月24日(木)~26日(土)の日程で、1日目は和歌山県(京大瀬戸臨海実験所、南方熊楠記念館、千畳敷き)を見学し、瀬戸臨海実験所では久保田先生に不老不死のペニクラゲを見せていただいたり、ペニクラゲ音頭の歌まで聴かせていただいて大いに感激しました。宿泊先の民宿ではすぐ横の日置川でとれた鮎や鰻を焼いてくださり、日本の民宿を体験させていただくとともに宿のご主人とも大いに交流を深めました。2日目は熊野古道中辺路を散策したり熊野大社、熊野速玉神社に参拝し、古い時代の熊野参詣の様子に触れることが出来ました。3日目には那智の滝を目の前に見て、更に本州最南端の潮岬までも足を伸ばしました。3日間を大変有効に過ごし、留学生達は日本の古い文化を大いに学び楽しむとともに、大勢の友達と良い思い出を作ることができたことと思います。参加者総数25名でした。



◆世界の料理講習会◆

■第29回ロシア料理 6月10日(火)

講師 Olga Rusalimovaさん(客員教授 Dr. Pavel Barsukov夫人)
メニュー ボルシチ、サラダ、パンケーキ、デザート(キセル)

■第30回中国料理 7月1日(火)

講師 李 炎さん(生物資源経済学D1)、曹 洋さん(食料・環境経済学科4回生)
メニュー 前菜(冷菜)、手作りワンタン(豚肉とにら)、蔥花餅



◆2008年度 後期行事予定◆

■第1回 ほっこりカフェ(ベトナムの農業についての談話会)

演者 Do Thi Di Thienさん 応用生命科学 M1
10月21日(火) 15:30-16:30 旧演習林会議室

■北部構内バザー

10月31日(金) 10:00-15:00 北部生協西側にて

■ベトナム料理講習会

11月中旬 講師 Do Thi Di Thienさん

■北部構内餅つき大会

12月又は1月 11:30-14:00